

幕間 全寮生徒会長シンシアの登場

アレスフォード帝国防衛学院。

その三年生で、全寮生徒会会長シンシア・カンバーランドは、その燃えるような深紅の髪を手で払った。

煤で汚れても、なお、彼女は美しかった。あたりの建物が燃えていて、一部の女子は服を脱がされ、ぐったりとしているか、すすり泣いている。

反帝政派の襲撃の余波だが、この騒動は一応の解決を見た。

シンシアたちの手で、敵は撃退されたのだから。

アレスフォード帝国防衛学院において、自治組織の頂点に立つのは全寮生徒会だ。クラス代表、各寮の寮長と自治参事会、それに風紀委員会をはじめとする委員会、秘密結社のな性格を持つ学院の倶楽部連合。この四つを束ね、圧倒的な声望を有するのが全寮生徒会であり、その生徒会長は七大公爵家の子弟が務めると決まっている。

だからこそ、生徒会長は時として教師以上の権威を持つのだ。

そして、シンシア・カンバーランドは本人も傑物として評判だった。金獅子寮寮長フィリア・アルビオンを抑え、学院序列第二位の地位を占める。

その美貌、高潔な人格、圧倒的な実力を以て、彼女は学院に君臨している。

もし彼女がいなければ、反帝政派の襲撃の前に学院は敗北していたかもしれない。

だが、現実にはそうはならなかった。クロエ、そしてアリアと名乗った女たちとその部下は、シンシアと生徒会役員たちによって撃退された。

反帝政派は数が多かったので、男たちに辱められ泣き叫ぶ女子生徒もいた。特に白百合寮は壊滅的な状況で、数十人の女子生徒がその場で犯され、さらに他の十人程度が拉致されている。だが、結局のところ、シンシアたちや各役員に率いられた風紀委員のメンバーが、反帝政派を各個撃破していった。

最大の脅威は実力者と思われるクロエ、アリアだったが、彼女たちは初戦でシンシアに敗れると、あっさりと撤退してしまっている。

そのため、人的被害も大きくはない。凌辱された女子生徒たち以外には、多少の負傷者がいるぐらいだ。

だが、シンシアの表情は険しかった。

生徒会庶務の一年生、イリス・ヘイスティングスが駆け寄ってくる。茶髪で小動物っぽい見た目の彼女はシンシアの目の前で、ピョンピョンと嬉しそうに飛び跳ねる。

「やりましたね！ 敵は壊滅。主犯の女たちは取り逃がしましたが、手下たちは捕縛に成功です」

「手下たちはどう見てもただのゴロツキだ。尋問しても、大した情報は出てこないだろうな」シンシアは手短かにそう答える。イリスは安心という様子だが、シンシアはまったく浮かれ

た気分にはなれなかった。

撤収が早すぎるし、あの程度の戦力で学院を壊滅させられる、とクロエたちは思っていたのだろうか。

何か別の計画があったのではないか。

彼女たちがこの学院の卒業生だと名乗っていたのも気がかりだ。アリア・ランカスターといえば、反帝政派に敗北・拉致された悲劇の女魔剣士^{ガーディアン}としても有名だった。

戦争省秘密情報局の体面を保つために極秘とされていたが、彼女が反帝政派として活動しているという情報は以前からあった。元同僚の女魔剣士を襲い、拉致して凌辱させている、とも。シンシアは父が秘密情報局の局長であるだけでなく、将来はその地位を継承することを期待されているため内部情報も把握していた。

だが、このような形でアリアが表舞台に登場するのは初めてのことだ。

反帝政派の襲撃開始直後、シンシアはクロエ、アリアに部屋を襲われ、一人で対峙した。またま風呂上がりを襲われたこともあったし、クロエ・アリアの二人は手練れの魔剣士でもある。

いかにシンシアが実力者でも、丸腰相手に二人がかりなら勝てると踏んだのだろう。

結果的にはシンシアは辛勝した。手近にあった魔剣を用い、二人を撃破したのだ。だが、もし魔剣がなかったら、と思うとぞつとする。

シンシアも、所詮、17歳の少女にすぎないと自覚していた。もしあの連中に負けていれば、

シンシアもまた、反帝政派のアジトに攫われ、女に生まれたことを後悔するような目に遭っていただろう。

(それに……なぜか下腹部が熱いし)

何か魔術を行使されたのだろうか。その形跡はないのだが……。

一度調べてもらったほうがよいかもしれない。

それに、クロエたちの襲撃は何かの仕込みで次回以降が本番の可能性もある。金獅子寮副寮長リーゼ・ノーフオークの報告では、金獅子寮の寮長や聖女エステル・エルミジットを監禁し、凌辱・洗脳することで味方につけようとしていたという話もある。これは失敗に終わったようだが、このような小細工は他でも行われていたと考えたほうが自然だ。

ともかくシンシアがクロエたち二人を撃退したおかげか、なんとか今回は事なきを得た。だが、次もこうなるとは限らない。

(ただでさえ、反帝政派の活動は活発化しているから……)

アルピオン帝国が発展すればするほど、その光の向こうには強い影が伸びるようになっていく。

シンシアはため息をついた。

「イリス。至急、各自治寮の寮長・副寮長を集めてほしい」

「? なんですか?」

「学院防衛組織を結成するんだよ」

第一章 公女殿下との婚約

レオン・ランカスターがアレスフォード帝国防衛学院に入学して、しばらくの月日が経過した。

この間、レオンは学院の美少女公爵令嬢、エステル・エルミジットを決闘で倒し、〈絶対調教〉スキルを使用。

黒鷲寮の男子生徒たちと戦い、先輩のセシリア・ブラウンや、妹のような存在でもあるルナ・ランカスターを救出している。もちろん、彼女たちもスキルを使つて支配してしまつたわけ。

そして、反帝政派の襲撃で義姉アリアと再会するも、彼女を取り戻すことは叶わなかった。

だが、金獅子寮寮長、つまり二年生の美少女フィリア・アルビオンによる陰謀は防ぐことができた。

彼女を倒し、そして抱いてから、すでに一週間が過ぎている。あのとき、フィリアを倒した直後にレオンは襲撃者であるクロエ、そしてアリアとも戦うつもりだった。ところが全寮生徒会によつてクロエたちは撃退され、拍子抜けしてしまつた。それ以後、アリアの行方もふたたびわからなくなつたので……レオンは仕方なく、寮長たちと普段通りの共同生活を送つていたのだ。

フィリアはアルビオン内親王家の当主という高貴な立場だ。七大公爵家を上回り、帝室に次ぐ地位を誇る。

そして、アレスフォード帝国防衛学院の金獅子寮といえば、名門中の名門。学院序列三位でもあるフィリアは、家柄でも実力でも容姿でも最高峰の才色兼備の美少女……なのだけれど。

目の前のフィリアは、そんなことを全然感じさせない。

「はい、レオンくん。あーん♡」

寮長はほんのりと頬を染め、恥ずかしそうにレオンに銀の匙を差し出した。卵入りスープをレオンに飲ませようとしている。

今、レオンたちは寮の別棟にいて、朝食をとつているのだ。

フィリアはレオンに敗北し、その純潔を奪われて、スキル〈絶対調教〉を使用された。レオンの従者へと成り下がってしまったのだ。

だが、寮長は嬉しそうで、むしろこれまでよりも元気いっぱいという印象だった。

アルビオン内親王家のしがらみから解き放たれ、レオンに支配される身になった。そのせいかもしれない。

もつとも問題はすべては解決していない。フィリアがアルビオン内親王家の血を引く以上、陰湿な儀式で辱められるという、悲惨な未来が待っている。実際、フィリアの妹、ソフィアはすでに犠牲として捧げられてしまつている。

だが、フィリアを最終的に助け出し、ソフィアを解放するにはレオンたちには力がまだ足り

ない。

だから、こうして英気を養っている……ということになっているのだが。

レオンはうろたえた。

「りよ、寮長……さすがにそれは恥ずかしいんですが」

「なんで？ あたしたち、恋人同士だよな？」

「い、いつ、恋人同士になったんですか!？」

「あたしの処女、強引に奪ったくせに……」

「あれは寮長がいけないんですよ……？」

「へええ、レオンくんは女の子を抱いて孕ませちゃったかもしれないのに、責任取らないんだ？」

寮長がからかうように言う。

本気で言っているわけではないと思うのだが。

「いや、責任を取らないというわけではないです！ けれど、抱いて中出ししちゃった女の子なら他にもいますし……」

「レオンくん、その言い訳はすごくダメ男っぽいよ……？ とりあえず、あーん♡」

寮長が納得しなさそうだったので、レオンは渋々、匙をばくつとした。

……思ったよりスープが熱い。舌をやけどしそうだ。寮長は「本当に恋人みたい！」なんて言いながら、うふふと笑っている。

もともと寮長は冗談大好きな性格だったけれど、今では完全にレオンに恋する乙女。

寮長がまるで別人のように見えて、レオンは戦慄した。

「というよりですね、《絶対調教》の使用は、寮長が焚き付けてやらせた面もありますよね」

ルナ、リンカ・グロスター、セシリア、ルシル・グロスター、アレン……とレオンは次々に手を出してしまっている。

それは《絶対調教》スキルを高めるためのもので、寮長も推奨していたことだ。

寮長はくすりと笑う。

「そうなんだけどね。でも、自分自身がレオンくんの『女』になったら、やっぱり違う感想が出てきちゃったの」

「違う感想って、やっぱり俺になんて抱かれたくなかったとか……？」

「そんなわけないよ。あたしは今すぐでもレオンくんとエッチしたいし」

「いや、今すぐはちょっと……」

実は周りにはフィリア以外の女の子もいる。

金髪碧眼の絶世の美少女エステル、そして華奢で可憐な一年女子フィオニー・ブラウンが嫉妬のこもった視線で二人を睨んでいた。

実のところ、エステルもフィオニーもレオンに《絶対調教》スキルを使われているし、下腹部には赤い淫紋がある。

だが、二人はレオンに最後まで抱かれてはいないのだ。

自称妹のルナに言わせれば、エステル、フィオニーの二人ともレオンに抱かれないと内心では切望しているという。

だが、エステルはプライドが高すぎてなかなか素直になれない。フィオニーは単純に奥手な性格だし、姉セシリアを救出した際に一緒にいてきた子なので、レオンが手を出すのをためらってしまっていた。

加えて、ルナや寮長たちがあれやこれやと妨害するという問題がある。

そう、寮長はあれほどレオンがスキルを使うのを勧めていたのに、なぜだろう？

寮長はふふつと笑った。

「だって、やっぱり嫉妬しちゃうものね。好きな人にはあたしのことだけを見てほしいもの」

寮長は、いや、フィリアは顔を耳まで赤くして、小さな声でそう言った。

直球で好きと言われて、レオンは動揺した。

いや、前もそんなことを寮長は言っていたし、強引に抱いたときも「ずっとレオンくんのが好きだった」と言っていたけれど。

昔からの友人でもある先輩美少女にそう言われると、レオンも照れてしまつて。

エステルが横から不機嫌そうに口を挟む。

「れ、お、ん？ 何をデレデレしてるわけ？」

「べ、別にデレデレなんてしてないよ」

「嘘つき。レオンのことを好きなのは寮長だけじゃないのに」

エステルがそんなことを小声で言う。

それはエステル自身のことだろうか。レオンの視線にエステルは顔を赤くした。

「る、ルナさんだって、セシリアさんだって、レオンのことが好きでしょ！ それに、アリアさんだって……」

そう。アリア。レオンの義理の姉で、憧れの女性。そして、最初に性奴隷にしまった人だ。

アリアが生きていてくれたのは本当に良かった。レオンとのあいだに身ごもった娘も無事生まれ、育てているらしい。

フィオニーが小首をかしげる。

「レオンさんって、学生なのに一児の父なんですわ……？」

「お父さんって呼んであげよっか」

寮長が笑いながら言う。絶対からかっている。

レオンは肩をすくめた。

「経緯が経緯ですし、娘……クレアには会ったこともないので、父親だなんてとも言えないですよ」

「そうだよええ。アリアさんを無理やり押し倒して中出ししちゃったんだものね♪」

「寮長……気軽に言わないでくださいよ」

あれはレオンにとってはトラウマなのだ。

自分にとつて唯一家族と呼べる存在。憧れ、本当に好きで、大事だった女の子。

そんな子を、テロリストの命令とはいえ、強引に犯してしまった。

あのとき、アリアは泣いていたと思う。

「でも、すぐにレオンくんのおち○ちんに夢中になったんでしょ？」

「媚薬を盛られていましたし、〈絶対調教〉スキルの影響もありましたからね……」

「だとしても、アリアさんはレオンくんのこと大好きだったもの。きつと許してくれているよ」

レオンとアリアは一ヶ月間、朝と晩、「交尾」させ続けられた。まるで実験動物のように。でも、アリアはたしかに発情して、感じていて……。「レオン様の硬くて熱いもの、気持ちいいですつ」と叫んでいた。

最後に会ったとき、アリアはとても優しく。そして、再会したときもアリアの優しさは消えていなかったように思える。

彼女が反帝政派への協力を強いられているなら、レオンはアリアを助け出さないといけない。もし仮にアリアが心から反帝政派の手先になってしまっていたら、そのときは……。

「レオンのスキルで、徹底的に調教してあげればいいでしょ？」

エステルが当然、という調子で言うので、寮長もフィオニーもぎよんとした表情をした。

どうしてそんな反応をされるかわからない、という様子で、エステルがぎよきよと二人

を見比べる。

「な、なによ？」

「いや、エステルちゃんってば、すっかりレオンくんの虜とりこだなと思って」

寮長の言うとおり、たしかに以前のエステルなら、〈絶対調教〉スキルを使うなんて選択を勧めたりしないだろう。

考え方がルナに毒されてしまっている気がする。

寮長がエステルの胸を突然、触り始める。

制服の横の隙間から手を差し込み、鷲掴みにしたのだ。

「ええっ!? りよ、寮長!? 何するんですか!? あんっ」

「エステルちゃんは、可愛いなあと思って。レオンくんスキルを使われて、抱かれない抱かれたいって思ってるのに、まだ処女なんなのね」

「そ、それは寮長のせいでもあるんですけど!? あっ、乳首触らないで……あんっ」

美少女二人が絡み合う姿を見て、レオンは慌てて目をそらす。いや、目をそらしている場合ではないのかもしれない。

二人ともレオンの所有物なのだから。

寮長はエステルにセクハラしながら、にやりと笑う。

「よく考えたら、スキルさえ使ってもらえば、最後までエッチしなくてもレオンくんは強くなるものね? レオンくんに抱かれるのはあたしだけで十分……ひゃっ」

寮長が甲高い声を上げる。レオンがその胸を背後からまさぐったからだ。柔らかな質感を両手で感じる。

彼女が逃れようと身をよじるが、レオンの力には敵わない。かえってレオンの手と自分の胸がこすれてしまい、「ひゃうっ」とあえぐことになっていた。

「れ、レオンくん……いきなりなにをするの!? やっ、やんっ」

「だって、寮長もいますぐエッチしたいって言っていましたよね?」

「そ、それは言葉の綾で……あんっ」

レオンの手が寮長の制服の横に差し込まれる。脇乳を直に触った後、さらにレオンの手が服の中に侵入する。

「だ、ダメっ! あんっ、れ、レオンくんのおっぱい星人!」

「エステルさんにだって同じことをしていたじゃないですか。しかも、エステルさんは俺のものなんですから、寮長は胸を触ってはダメです」

「れ、レオンくん。独占欲強いね……あっ、ち、乳首つまんじゃダメっ」

「寮長も俺のものなんだから、我慢してくださいよ」

「我慢なんてするわけないじゃん。だって、レオンくんに可愛がってもらおうの嬉しいものね?」

寮長がふふつと挑発的に笑う。レオンは寮長の背後に密着し、自分の下半身を寮長のお尻のあたりにぐりぐりと押し付けた。



「も、もうっ！ レオンくんの硬いの、当たっちゃってるよ？ あっ」

レオンは寮長のスカートをめくつてしまう。寮長がかあつと顔を赤くした。パンツが丸見えになった寮長の股間にレオンのものをこすり合わせる。

「あつ、あああああつ！ レオンくん……このままだとレオンくんだけじゃなくて、あたしもお母さんになっちゃうよ……」

「なりたいんですか？」

「レオンくんの赤ちゃんだつたら、産んであげてもいいよ？」

寮長はそんなふうに甘い声で言う。本当にこの場で、寮長を犯してしまおうか。

レオンはそんなことを考える。《絶対調教》スキルのせいかな、最近、むらむらが抑えられないのだ。

エステルとフィオニーが「食堂でなんてダメでしょ!」「寮長ばかりずるいつ!」なんてわざわざ騒いでいるが、もはやレオンの耳には半分も入っていないかった。

このまま寮長を抱いてしまいたい……。

だが、それは強制的に止められた。

食堂の扉が開かれたからだ。

ルナ・ランカスター……レオンの自称妹の公爵令嬢が、そこには立っていた。

彼女は顔を赤らめる。

「あ、朝からお盛んですね……お兄様。そんなに欲求不満なら、あたしが抜いて差し上げまし

たのに」

そんな下ネタをルナは言うが、レオンは咎められない。現に寮長を犯そうとしてしまつているのだし。

ルナの後ろから一人の長身の少女が現れた。

金色の長く美しい髪は、まるでプラチナのように光り輝いている。

すらりとした身体にゆつたりとしたドレスを着ているが、豊かな胸とお尻のあたりが大胆に露出・強調されていて、艶やかだった。

まるで女神のような美しさだ。

レオンが一瞬見惚れると、彼女はふふつと笑い、宝石のような金色の瞳を輝かせる。

「はじめまして、わたくし、フレイヤ・ユートラントと申します」

フレイヤ・ユートラント……聞いたことがある名前だ。しかも見覚えもある。

ユートラントといえば大陸にある大公国の名前だ。

つまり……。

レオンは慌てて、寮長の乳房から手を離れた。解放された寮長は「残念……」なんて言うが、それどころではない。

「あなたはユートラント大公国の第三公女、フレイヤ殿下……ですか？」

レオンの問いに、フレイヤは微笑み、首を縦に振る。

「わたくしはそのような立場に生まれました。それともう一つ、でんせい天青の魔術師とも呼ばれてい

ます」

ユートラント大公国といえば、大陸のライン連邦諸国の中でも最も古い歴史を誇る国だ。その君主、ユートラント大公家は古代エトリリア帝国の末裔でもあるといわれ千年以上にわたる歴史を有する。

アルピオン帝国のバッキングム朝やその臣下の七大貴族より、遥かに高貴な血筋だということだ。

そして、その大公の娘フレイヤ・ユートラントは単に血筋が優れているだけではない。

一つはその美貌ゆえにとっても知名度が高い。

フィオニーがものすごく興奮した様子で身を乗り出す。

「ふ、フレイヤ殿下！ 新聞の魔法写真でお姿を拝見したことがあります！」

「有名な人の？」

エステルが小首をかしげて、小声でルナに問いかける。フレイヤをここまで連れてきたルナなら、知っていると聞いたのだろう。

ルナはびつくりした様子で「ご存知ないんですか!？」と反応する。

「大陸随一の絶世の美少女！ 男なら、いえ女でも誰もが胸をとぎめかせたことのある美しさ！ 海の向こうのアルピオン帝国だって、貧民街の子供だって名前を知っていますよ」

「そ、そうなの？」

「エステルさんは魔剣士としての訓練ばかりしているから、女の子らしい話題を知らないんで

すね。可哀想に……」

「人を脳筋みたいに言わないで！」

「ともかく、フレイヤ殿下のことを知らないのは、人生の損失です」

レオンでもフレイヤの名前は新聞で何度か目にしたことがある。たしかに美しい人だなとは思ったが、所詮、海の向こうの大陸の少女だ。

ユートラントの歴史は古いが、ライン連邦に属する小国にすぎないということもある。

レオンとは縁のない世界の人間だと思っていた。しかし、現に目の前に彼女はいる。ミーハーなフィオニーは大興奮だし、ルナもずいぶん彼女に心酔しているようだ。

フレイヤはふつと微笑む。

「ルナさん、褒めすぎでしょう？」

ルナは胸に手を当て、うやうやしくフレイヤに一礼する。

「殿下のことでしたら、どれほど賛辞を重ねても足りるということはありません。美しいだけではなく、アカデミーの魔術師なのですから」

そう。

フレイヤが有名なのは、もう一つ理由がある。

彼女は大陸魔法アカデミーの魔術師なのだ。全部で定員はたったの七十二人。アカデミーの所属者は、世界で最も優れた「魔法」の使い手と言っても過言ではない。

そんな栄光ある座に、フレイヤは10代で名前を連ねた。

エステルが思い出したという様子で、「ああっ!」と声を上げる。

「あの大魔法使いフレイヤ・ユートラント! 天青の魔術師! 聞いたことがあるわ」

魔法や魔剣士に関わることに、エステルの興味は集中しているらしい。努力家のエステルらしいといえばエステルらしい話だ。

「それに、わたしの師匠も会ったことがあるって」

エステルが自身の師匠の名前を告げると、フレイヤは少し嬉しそうに「昔お世話になりましたね」とつぶやいた。

ともかく、フレイヤはあらゆる意味で大物だ。

そんな彼女がどうして島国のアルビオン、それも学院に現れたのか。

フレイヤは完璧な微笑みを浮かべる。

「皆さんはわたくしを過大評価しすぎです。すべての余計なことを取り払えば、わたくしはただの小娘にすぎません。つまり……わたくしも学校に通って青春を送る権利があると思いますん?」

「で、殿下が?」

一国の君主の娘で、しかも10代の若さでアカデミーの魔術師になった少女。

そんな彼女が学校で何を学ぶというのか。

レオンは冷や汗をかいた。

フレイヤはにつこりと笑う。

「わたくし、帝国防衛学院に入学して、金獅子寮のこの別棟に住むことになりましたの。よろしくお願いますね、皆さん」

嘸然として、レオンは周りを見る。エステルやフィオニーもぼかんとしていた。

ただ、ルナは平然としている。彼女を案内してきたのだから、事情も知っていたのだろう。

そしてずっと無言の寮長も、こくりとうなずく。

「ユートラント大公家とアルビオン内親王家は昔から友誼を結んでいるの。フレイヤ殿下をお呼びしたのは、その縁なんだよね」

「それにしても、この建物でなくてもいいのでは……?」

副寮長のリーゼ・ノーフォークを除けば、ここに住む女子生徒たちはレオンの性奴隷、あるいは性奴隷候補だ。

有名人で高貴な身分のフレイヤ殿下と一つ屋根の下というのは問題がある気がする。

けれど、寮長は首を横に振った。

「反帝政派の学園襲撃事件もあったからね。あたしも片棒を担いでおいてあれだけど、今回は生徒会長のシンシアたちが学院本体のほうは守ってくれた。でも、次に襲撃があったとき、どうなるかわからない」

「だから、殿下には俺たちがすぐ守れる場所にいていただく、ということですか?」

「というより……フレイヤ殿下にも協力していただくだけだね」

協力?

何をだろう？

「アレスフォード帝国防衛学院は帝国を守るための魔剣士を養成する場所。でも、その前に、あたしたち自身があたしたちを守れないと」

寮長は人差し指を立てる。

「学院防衛組織、『金蘭の夜明け団』。団長はフレイヤ殿下に務めていただくの」

幕間 敵と女たち

「あつ……！ あつ！ あつ、あああああつ。あつ、いやあああつ」

小柄な少女が一糸まとわぬ姿で四つん這いになっている。

グロスター公爵家のベッドの上。そこで彼女は背後からその茂みを肉棒で突かれていた。

少女の名前はエミリ。子爵令嬢で美しく、何不自由なく育った。

彼女の運命が変わったのは、クラスメイトのアレンという少女に騙されたからだ。

想い人の名前を告げられ、彼女は黒鷲寮の地下に誘い込まれた。告白されるのかと胸をとぎめかせて、向かった先は地獄だった。

彼女は男子生徒たちからその場で胸をまさぐられ、秘所に指を突っ込まれ、逃れようとする
と羽交い締めにされた。

男子生徒の一人、ハイランドは彼女に決闘を持ちかけた。勝ったら解放するが、負けたら慰
み者となることに同意する、と。

エミリは剣の腕には自信があつたし、その場を逃れたい一心で決闘を受け入れた。

だが、エミリはあつさりと敗北した。ハイランドは実力者だったし、アレンに騙され媚薬を
飲まされていたからでもある。

そして、エミリは黒鷲寮の性処理係へと堕ちた。実家が貴族といつても、彼女は下級貴族に

すぎない。

黒鷲寮の上級貴族の手で、事実には隠蔽された。

そうして、エミリは毎日のように嬲られ、妊娠に怯える日々を送っていた。

黒鷲寮の地下牢はレオン・ランカスターらによつて解放された。本来なら、エミリもそのとき助かっていたはずなのだが、どさくさに紛れてガイル・グロスターによつて拉致されてしまったのだ。

それはエミリが、セシリア・ブラウンに次いでひととき美しい少女だったからでもある。

「あつ、もうダメええつ！　なんでわたしばかりこんな目に……ああんつ」

媚薬漬けのエミリがよがり狂い、無意識に腰を振る。

普通ならエミリほど美しい女を抱けば、多少は気分も晴れるだろう。

だが、ガイルの心は激しい苛立ちに包まれたままだ。

（クソつ！　金獅子寮の連中め……！）

ガイルが乱暴に激しくエミリの秘所を突くと、エミリは「あつ、ああんつ。もう許してつ」と懇願する。

だが、もちろん、ガイルはエミリを解放するつもりなどない。

エミリはガイルに残された数少ない女だからだ。

「出すぞ、エミリ！」

「あつ！　ダメ、ダメえええつ！　赤ちゃん、赤ちゃんできちゃうううつ」

「もう何十回も中出ししただろ？　諦めろ」

「あつ、いやあああつ」

ガイルの肉棒がエミリの秘所に白濁を注ぎ込む。

エミリは絶望した様子でぐくつとうなだれる。

いづれエミリはガイルの子を孕むだろう。

だが、そんなことはどうでもいい。孕んだら、使用人の男たちにでも与え、輪姦させよう。

（こんな女では……オレの空虚は埋められない）

ガイルは金獅子寮の人間に手を出した。エステルにいたずらしようとし、レオンに決闘を挑み、ルナを誘拐した。

その代償はあまりにも大きかった。本来なら売り払えば、かなりの金になっただろうメイドのリンカを奪われた。

それだけだったなら耐えられたのだが、仕返しとしてルナを誘拐したことで、かえってレオンたちの黒鷲寮介入を招き、地下牢の少女たちのほとんどを解放する羽目に陥つてもいる。

ガイルの「お気に入り」だったセシリアとフィオニーの姉妹も、レオンの手に落ちた。

だが、どんなことよりも重大なことが一つある。ガイルが最も手に入れたかったものをレオンに奪われたのだ。

姉、ルシル・グロスターの処女。それをレオンは奪っていった。

ガイルは実の姉・ルシルに恋い焦がれていた。セシリアたちを犯していたのも、ルシルを手

に入れない代償行為にすぎなかった。

名門貴族の子弟であるガイルが、まさか実の姉と関係を持つわけにもいかない。そして、それはルシルの将来を傷つけてしまう。

もしルシルに拒絶されたら、という恐れから、ガイルからルシルに告白することもできなかった。

ガイルが犯したのは屋敷のメイドたちや、地下牢の女性たちといった自分よりも格下、言いなりにできる女性ばかりだった。

ところが、レオンはガイルへの反撃の一環として、ルシルの部屋に侵入し、強引に彼女を犯してしまった。

ルシルもルナ誘拐に関わっていたから自業自得ではあるのだが、そんなことはガイルにとつてはどうでも良かった。

(オレの……オレのルシル姉さんを……)

そのルシルは今、ガイルの部屋の片隅で手足を鎖に縛られ、一糸まとわぬ姿で吊るされていた。

ガイルとエミリの性行為を見せつけられ、赤面している。

ガイルはルシルに近寄り、彼女を見下ろした。

ルシルは媚びるようにガイルを見上げる。

「ね、ねえ、ガイル。そろそろ解放してくれない？　な、なんで私にこんなことをするの？」

私たち、仲の良い姉弟だったわよね？」

「むしろもつと早くこうしていれば良かったよ」

ガイルはそう言うのと、ルシルのたわわな胸をまさぐった。直接、胸を触られ、ルシルが

「あっ……」と声を上げる。

「が、ガイル！　ダメ……」

「レオンの奴に犯されたくせに今更恥ずかしがるのか？」

「そ、それは……無理やりされたんだもの」

ルシルはレオンの性奴隷とされ、淫紋が下腹部に浮かんでいる。だが、ルシルはレオンへの嫌悪の言葉は吐かなかった。むしろ……レオンを憎からず思っているようにすら見える。

そのことがガイルにとっては許せなかった。

「姉さんのことはオレがこれから一生守ってあげるからね。この部屋にいれば、何も恐れることはないよ」

「い、一生……？」

「またレオンに襲われるかもしれないだろ？　オレの部屋から二度と出ないで、オレのためだけに生きてほしいんだよ」

「な、なんで私がそんなこと……あつ」

ルシルの下腹部に透明の触手のようなものが這う。ルシルがひとつ悲鳴を上げた。

これは反帝政派の幹部、クロエから借りたものだ。

「姉さんには一つ協力してほしいんだよ」

「きよ、協力……？」

「レオンを倒すために、オレは魔獣を召喚する。そのためには賛^{にえ}が必要だ」

三人の少女を捧げ、ガイルは魔獣を呼び出すつもりだ。そして、レオンに復讐する。

その儀式のために賛となるのが、一人は子爵令嬢エミリ、一人は門番の少女アレン、そして、最後の一人が姉・ルシルだった。

ルシルがひとつ悲鳴を上げる。触手はルシルの秘所へとまとわりつき、桜色の乳首を覆う。

触手がルシルの身体を刺激し、ルシルは「あああああああつ！ いやあああああああ

あつ！」と甲高い悲鳴を上げた。

「が、ガイル……！ 許して、許してええええ！ あつ、こんな化け物に……私、私いいいいつ！ あつ、ダメええええええええ！」

ルシルの甲高い悲鳴が部屋の中に響き渡った。そして、エミリも触手に襲われ「あつ、あつ！ ああああああああああつ！」とあえいでいる。

ガイルは微笑んだ。

処女を奪われたルシルはもう、汚^けされた女だ。もはやルシルの純潔は取り戻せない。

だから、これからガイルはルシルを調教し、そして、レオンへと復讐するのだ。

触手に秘所を貫かれ、ルシルが「いやあああああああああつ」と絶叫する。

「助けて……誰か……あつ！ 助けて……レオンっ！」

ルシルがレオンの名前を叫んだので、ガイルはカッとしてルシルの頬を張ってしまう。

ルシルは大人しくなり、後はぐずりながら触手を受け入れるだけの存在となった。

ガイルは心の中で邪悪な思いを巡らす。

（エステル、ルナ、フィリア、それにアリアだったか？ 全部、オレの女にしてやる）

クロエが部屋を訪れたのはそのときだった。